

【日時】

令和6年2月22日(木)15:00~17:00

【場所】

新館1階 会議室

【参加者】

<学校協議委員>

井坂 行男 (大阪教育大学教育学部 総合教育系特別支援教育部門 教授)

伊藤 弘一郎(南大江東連合新興町会 会長)

前田 浩 (大阪ろう難聴就労支援センター 理事長)

良原 恵子 (大阪府立スクールカウンセラー スーパーバイザー)

尾中 友哉 (NPO 法人 SilentVoice 代表)

佐藤 てるみ(PTA 会長)

1. 開会

2. 学校長挨拶

3. 各分掌からの活動報告

4. 議事

◇令和5年度学校教育自己診断

<委員からの主な意見・質問及び回答>

- ・結果について、学部によって答え方が違ってくるので、学部で分けて分析するほうがよい。
- ・教育活動をよくしていくためのアンケートであるので、学部の結果を戻して次年度に向けて生かしてほしい。
- ・参観でいろんな学部を見ていると、成長した子どもたちの姿や作品も素晴らしいと感じている。通常の参観に来られる人が少ないので、教員の配慮が見えにくいのでは。
- ・アンケートの各項目で肯定評価が高い低いで分析しているが、教員の専門性や一人ひとりの関わりを考えた時に、100%をめざすことも大切ではないか。否定的な意見30%をどう考えるかといった活用方法も大切。

◇令和5年度学校経営計画 最終報告 学校長より説明

<委員からの主な意見・質問及び回答>

① 子どもたちの学ぶ力の育成とキャリア教員

- ・卒業生の相談の中で大学を辞めたい、大学を辞めたというのが増えている。大学に入りやすくなった中でノートテイクなどの配慮があったとしても学習についていくしんどさを感じている。卒業生の追跡も大変だと思うが、どうやってフォローしていくかを考える必要がある。
- ・私立の学校、大学も含めて聴覚障がいの生徒は合理的配慮の対象になる。生徒の支援は情報保障だけでは終わらない。支援ルームなど、コーディネーターを含めた様々な問題のフォローが必要。
- ・字幕で読むという行為は、話すことを読み取って理解するのに時間がかかる。それを乗り越えて初めて授業についていける。高校時代にも似たような取り組みでできるかどうかを予備的に取り組んで構えを作ることもよいのでは。

② 教員の専門性の向上

- ・研究保育、研究授業を通して変わったところ、実感としてつかったところがあれば教えてほしい。
→各部報告。
- ・過去はチョークの使い方、プリント提示の方法など、聴覚支援のクラシックな授業が伝わっていたが、今は少ない。経験のある教員が他の教員に見てもらおう授業(モデル授業)を行った方がよい。
- ・ICTの技術は若い人も持っている。若い人の力もあると思う。

③ センターの機能充実と開かれた学校について

- ・みみねっとは幼稚部を卒業して外部の学校に就学した家庭に対して郵送などを行い、情報を伝え繋がり続けることも大事ではないか。
- ・聴覚支援の子どもの数は、全国的に見ても減っている。高等部だけ中学校を回るのではなく、全校的に聴覚支援学校の在り方を伝えていく必要がある。
- ・高校の中にはNPOの居場所カフェを作っているところもある。教員でやるのではなくNPOを入れていく方法もあるのでは。

◇令和5年度学校経営計画

- ・令和6年度の計画については「ことばをはぐくむ」「人とつながる」「未来を切り拓く」を3つの柱として、めざす学校像に取り入れている。

5. 事務局より

6. 閉会